

ドラッカー学への招待

第65回

仕事と人生の省察

ものつくり大学特別客員教授 井坂康志



次なる人生を考える

いわゆる成果について私たちはおおげさに考えがちである。人から認められたり、ほめられたり、持ち上げられたりする成果にばかり目がいつてしまっている。トータルな人生にとって意味ある成果が見えなくなってしまう。

ちよつと考えてみてほしい。「あなたにとつての人生の成果は何ですか？」

「事業で大成功すること」

「ベストセラー作家になること」と

「大発明すること」

「海外に移住してリッチな暮らしをすること」

そのような答えが返ってくるかもしれない。

もちろんこれらの成果が悪いものであるはずがない。実際にドラッカーはいずれをも手に入られるポジションにいた。

しかし、幸福と心の平安を第一の目標にしたとき、これらが心を満たしてくれるかどうかははっきり言ってわからない。

ドラッカーは世界的な知の巨人なのに、素朴な小さな家に住

んでいた。巨大コンサルティング会社だつて作れたのに、秘書も持たなかった。

ドラッカーにとつては、有名になることや大金持ちになること、権力者になることは、成果に入らないと感じられた。

ただ、泰然と籐いすに腰かけて、ありのままに世界を見て、人の役に立つべく書いたり教えたり相談に乗ったりすることが、最も価値ある成果だった。

意味を考える

自分にとつて最も意味のある成果とは何だろうか。

ドラッカーは「ミッションからはじめよ」と述べている。ミッションとは使命、すなわち自分の内面の深い泉から湧き出てくるものである。外側にあるものではない。

「自分はどんなときに最も幸せだろうか？」

「自分は持つて生まれた強みで世に貢献できているか？」

「何をもつて私は死んだ後に覚えられるだろうか？」

自分にとつて意味のある成果について時間をとつて徹底的に思いをめぐらせてみると、人生

を無駄にせずにするのだとドラッカーはいう。

仕事以外の活動をしてみる

「セカンドキャリアをどうすべきかという問いへの第二の方法は、パラレルキャリア（第二の仕事）を持つということである」（『明日を支配するもの』）

私はドラッカーの助言を受けて非営利活動でも大成功した人の本を翻訳したことがあるのだが、実践者の誰もが口をそろえるのは、とほうもなく有意義であったということである。

べつに会社を辞めてNPOに転職するのではなく、余裕のある時間を使って、自分の力を活用するだけでおつりがくるくらいで十分である。

とくに定期的に活動に参加することで、非営利活動が暮らしの一角を占めるようになればしめたものである。非営利活動といつてもおおげさなものである必要はない。どんなものでもいい。地元のクラブとか、学校、宗教、サークルなどなんでもいいと思う。

非営利組織が楽しいのは、会社にはないすべてがあるからだ。

❀❀❀ 会社は小さな世界

その際にはいつも自分に言い聞かせなければならぬ一文があるのを忘れてはならない。「ここは会社ではない」がそれである。

すぐに気づくだろう。私たちは会社を過大評価しがちである。だが思う以上に、会社は社会の一部にすぎないことを忘れてちである。会社を過剰に拡大してとらえる傾向は、非営利ではむしろ邪魔になる。

「民間企業では常識ですよ!」と叫びたくなるときがあるが(何か不満があるときほどそう言いたくなる)、そのたびに何度でも「ここは会社ではない」と自分に言うようにすることである。そうすればほとんどいつも、硬さがとれて、心のチャネルを切り替えることができるだろう。

非営利組織のメリットは、会社では絶対に知り合えない人と会える特権が得られることである。そのような人たちと定期的に活動をともにすることで、自分が社会に対してできることを報酬であらう。

私の知人や友人の多くも、この経験によって自分では知らなかった自分自身への理解がいちだんと深まったという。もし周囲の会がいまひとつならば、自分で作ってしまうというのも一興かもしれない。

「貢献をなしうるには、成熟が必要である。仕事の外に関心を向けられなければ成熟はできない」(『ドラッカー論文集——ピープル・アンド・パフォーマンス』)

❀❀❀ 未知の人に会いに行く

未知の人に会うことでも人生が変わり、より豊かな人になることができる。

月に一度、少しの時間をさいて、自分が知らないタイプの人に思いをはせてみる。きちんと時間をとって、ペンとメモを取り、自分が自分に期待することは何か、どんな人から学ぶべきなのかを書いていく。

これにトライするなら、どれほど多くの知らないことがあることか、愕然とするだろう。ドラッカーの最晩年に「ドラッカーから「人生を大きく広げる方法」を学んだブルース・ローゼ

ンステインは、人の輪を広げることが、豊かな第二の人生を手にするうえできわめて重要だと指摘している。

知らない種類の人、未知の領域の専門家、あるいはだいが長く会っていない昔の知人友人でもいいかもしれない。著名であつてもいいし、著名でなくてもいい。

それは、自らにとって意味がある以上に、会いに行く先の人にとつても大きな意味がある。会いたい人にとつても、あなたは違う世界の人なのだから、大きな刺激になるはずである。そこは自信を持っていい。

❀❀❀ 作品を通して会う

会いに行く相手は、現在生きている人でなくてさえかまわない。たとえば他界した作家、偉大な思想家、芸術家でもいい。作品にふれることは立派な「会いに行くこと」である。演奏会や美術館に行く、小説や詩を読んでみる。

「徒然草」も言うように、今は亡き人々を友として心ゆくまで語り合うのはとても深い人生への観照を呼び起こしてくれる。

相手が生きている人であれ、そうでない人であれ、誰であつたとしても、学びの扉はどんなときも開かれているし、方法はともシンプルである。

ぺこりと頭を下げて、「教えてください」とひとこと言えばいい。どんなメリットがあるかなど考えなくていい。自分の肩書きや社会的地位なども考えなくていい。

学ぶとは、頭的作用だと思われているが、そうではない。学ぶとは心の作用である。何が起るかなどは事前にはわからない。会つてみてはじめて、自分が会いたかつた理由がわかることとさえある。初対面の方には、最高度にていねいな手紙やメールを書いてみるといいかもしれない。今月からでも、未知な人に会いに行くことを習慣にしてみよう。つくづくよかつたと思うようになるに違いない。

「知識は人が具現化し、人が持ち運ぶ。人が創造、改善、刷新する。人が適用し教える。人が利用し誤用する。したがつて、知識社会への転換とは、人が中心になるということである」(『ポスト資本主義社会』)